



TITLE:

三重大学泌尿器科における1968年-1979年の12年間の外来患者臨床統計

AUTHOR(S):

堀, 夏樹; 大串, 典雅; 袴田, 隆義; 川井, 忠; 森, 脩; 斎藤, 薫; 波部, 英夫; ... 朴木, 繁博; 山崎, 義久; 多田, 茂

CITATION:

堀, 夏樹 ...[et al]. 三重大学泌尿器科における1968年-1979年の12年間の外来患者臨床統計. 泌尿器科紀要 1980, 26(9): 1101-1107

ISSUE DATE:

1980-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/122732>

RIGHT:

三重大学泌尿器科における1968年～1979年の 12年間の外来患者臨床統計

三重大学医学部泌尿器科学教室（主任：多田 茂教授）

堀 夏樹・大串 典雅・袴田 隆義・川井 忠
森 脩・斎藤 薫・波部 英夫・鈴木 紀元
浜野耕一郎・前田 真・保科 彰・柳川 真
杉村 芳樹・西井 正治・米田 勝紀・田島 和洋
浦田 英男・千種 一郎・朽木 宏水・森下 文夫
堀内 英輔・加藤 広海・朴木 繁博・山崎 義久
多田 茂

CLINICAL STATISTICS ON OUTPATIENTS AT THE UROLOGICAL DEPARTMENT OF MIE UNIVERSITY HOSPITAL DURING RECENT TWELVE YEARS (1968~1979)

Natsuki HORI, Norimasa ŌGUSHI, Takayoshi HAKAMADA, Tadashi KAWAI,
Osamu MORI, Kaoru SAITŌ, Hideo HABE, Norimoto SUZUKI, Kōichirō HAMAMO,
Makoto MAEDA, Akira HOSHINA, Makoto YANAGAWA, Yoshiki SUGIMURA,
Masaharu NISHII, Yoshinori KOMEDA, Kazuhiro TAJIMA, Hideo URATA,
Ichirō CHIGUSA, Hiromi TOCHIGI, Fumio MORISHITA, Eiho HORIUCHI,
Hiromi KATO, Shigehiro HŌNOKI, Yoshihisa YAMASAKI and Shigeru TADA

From the Department of Urology, Mie University School of Medicine

(Director: Prof. S. Tada M. D.)

In total 15,888 outpatients were newly seen at the Urological Department of Mie University Hospital during the period of 1968 to 1979, 14,300 patients had urological diseases.

The statistical analysis were performed on the patients and revealed some results.

<緒 言>

われわれは最近12年間(1968年～1979年)の外来患者臨床統計をおこなったので報告する。

<方 法>

1968年(昭和43年)1月1日より1979年(昭和54年)12月31日までの12年間に、三重大学医学部附属病院泌尿器科(昭和48年4月に三重県立大学より国立三重大学に移管した)を新規に受診した者をすべて新患として登録し、これを対象とした。診断の確定あるいは未確定により、確診、疑診、未診および正常に分類

し、それぞれの群で集計した。

<結果ならびに考察>

1) 総括的事項

12年間の外来新患総数は15,888名で、診断が確定したものの(確診)は12,291名(77.4%)、その男女比は1.84であった。小児新患総数は2,188名で、外来新患総数の13.8%を占め、男女比は4.06であった(Table 1)。

総患者数の年度別推移は1968年(昭和43年)の男性・女性および総患者数を1とした指数でみると、1974年(昭和49年)以降、つまり国立三重大学に移管した

Table 1. 外来患者の診断別内訳

	総 数	確診群	疑診群	未診群	正常群※
男 性	1 0 3 5 1	7 9 6 6	9 5 2	3 6 7	1 0 6 6
女 性	5 5 3 7	4 3 2 5	4 4 9	2 1 1	5 2 2
合 計	1 5 8 8 8	1 2 2 9 1	1 4 3 1	5 7 8	1 5 8 8
割 合 (%)	1 0 0 . 0	7 7 . 4	9 . 0	3 . 6	1 0 . 0
男女比	1 . 8 7	1 . 8 4	2 . 1 2	1 . 7 4	2 . 0 4
cf. 1: 小児	2 1 8 8	1 8 9 6	7 5	3 6	1 8 1
cf. 2: ※	Vasectomy 希望の 6 2 名を含む				

頃より急激な患者数の増加をみている。そしてそれはおもに男性患者数の増加によるもので、総患者数の年平均は1,324名、うち男性863名(変異係数:11.4%)、女性461名(変異係数:6.9%)で男性患者の各年度における散布度が大であった(Table 2)。

Table 2. 外来患者の年度推移

年度	男性	女性	合計	男女比
昭 43	739 (1.00)	439 (1.00)	1178 (1.00)	1. 68
44	789 (1.07)	445 (1.01)	1234 (1.05)	1. 77
45	791 (1.07)	503 (1.15)	1294 (1.10)	1. 57
46	788 (1.07)	492 (1.12)	1280 (1.09)	1. 60
47	812 (1.10)	501 (1.14)	1313 (1.11)	1. 62
48	806 (1.09)	402 (0.92)	1208 (1.03)	2. 00
49	887 (1.20)	485 (1.10)	1372 (1.16)	1. 83
50	789 (1.07)	463 (1.05)	1252 (1.06)	1. 70
51	1063 (1.44)	436 (0.99)	1499 (1.27)	2. 44
52	1008 (1.36)	489 (1.11)	1497 (1.27)	2. 06
53	924 (1.25)	460 (1.04)	1384 (1.17)	2. 01
54	955 (1.29)	422 (0.96)	1377 (1.17)	2. 26
合 計	10351	5537	15888	1. 87

年齢別患者数は男女とも20代が最多で、全体の18.5%を占め、ついで30代の17.9%、第3位は40代、以下小児、50代、60代と続く。

小児患者数は総数では第4位であるが、男性にかざると第3位を占め、男児患者数は男性患者数の17%であった。全患者の平均年齢は38.7±21.1(mean±SD)歳であった(Fig. 1)。

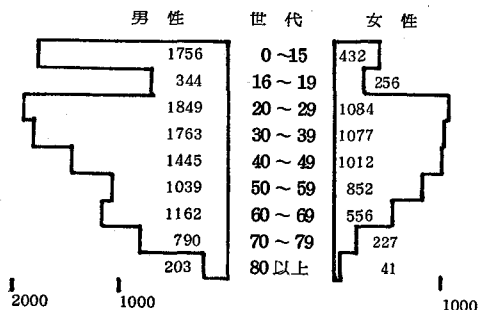


Fig. 1. 世代別患者数

2) 確診群

正常群を除いた14,300名のうち、確定診断がくだされたのは12,291名(86.0%)であった。小児では正常群を除いた2,007名のうち、確定診断がくだされたのは1,896名(94.5%)であった。

(1) 系統別疾患頻度 (Table 3)

系統別疾患頻度は非特異的炎症が4,371名(35.6%)と最も多い。石神ら¹⁾、高安ら²⁾、後藤ら³⁾、原ら⁴⁾の報告はおおむね20~25%であるのでかなり高率である。ついで尿路結石(15.7%)、腫瘍(14.5%)、奇型(12.4%)が続く。男性性的疾患は第4位を占めるが、これは男性不妊の増加がおもであり、石神ら¹⁾、仁平ら⁵⁾が指摘するように特殊外来設置による専門的治療と社会的環境の背景が呼応したものである。

Table 3. 系統別疾患順位

系統別疾患	患者数	%	男女比
1 非特異的炎症	4371	35.6	0.68
2 尿 路 結 石	1934	15.7	2.64
3 腫 瘍	1781	14.5	2.85
4 奇 型	1529	12.4	5.55
5 男性性的疾患 及び 精神身体疾患	1101	8.9	89.64
6 そ の 他	1575	12.9	1.61
合 計	12291	100.0	1.84

(2) 疾患別頻度 (Table 4)

疾患別頻度は急・慢性膀胱炎が第1、3位を占め、両者あわせると25.1%と約1/4を占める。以下、上部尿路結石(14.5%)、前立腺肥大症(6.5%)、男性不妊(5.8%)、包茎(5.4%)および停留辜丸(2.9%)の順であった。30位までに悪性腫瘍は膀胱腫瘍(9位、2.6%)と前立腺癌(29位、0.7%)が顔を出しているが、膀胱腫瘍の頻度は石神ら¹⁾、高安ら²⁾の報告と同じ頻度であった。

Table 4. 疾患順位 (全体)

1 急性膀胱炎	2228 名	18.1 %
2 尿管結石	1159	9.4
3 慢性膀胱炎	858	7.0
4 前立腺肥大症	802	6.5
5 男性不妊	711	5.8
6 包 茎	662	5.4
7 腎 結 石	632	5.1
8 停留嚢丸	362	2.9
9 膀胱腫瘍	318	2.6
10 急性副嚢丸炎	295	2.4
11 膀胱頸部硬化症	286	2.3
12 腎 出 血	280	2.3
13 神経因性膀胱	228	1.9
14 遊 走 腎	225	1.8
15 夜 尿 症	218	1.8
16 尿道カルンケル	206	1.7
17 陰嚢水腫	203	1.7
18 急性腎盂腎炎	185	1.5
18 包 皮 炎	185	1.5
20 急性尿道炎	183	1.5
21 水 腎 症	144	1.2
22 膀胱結石	134	1.1
23 尿道狭窄	133	1.1
24 前立腺炎	120	1.0
25 慢性腎盂腎炎	117	1.0
26 腎 結 核	107	0.9
27 V U R	106	0.8
28 淋 疾	100	0.8
29 前立腺癌	95	0.7
30 膀胱頸部ポリープ	91	0.7
そ の 他	918	7.5
合 計	12291	100.0

(3) 男女別疾患頻度 (Table 5, 6)

男性疾患頻度は尿管結石, 前立腺肥大症, 男性不妊が上位を占め, 女性疾患頻度では急・慢性膀胱炎が54.2%と上位疾患数の過半数を占めた.

Table 5. 疾患順位 (男性)

1 尿管結石	1159 名	14.5 %
2 前立腺肥大症	802	10.1
3 男性不妊	711	8.9
4 包 茎	662	8.3
5 急性膀胱炎	588	7.4
6 腎 結 石	405	5.1
7 停留嚢丸	362	4.5
8 急性副嚢丸炎	295	3.7
9 膀胱頸部硬化症	277	3.5
10 膀胱腫瘍	241	3.0
そ の 他	2464	30.0
合 計	7966	100.0

Table 6. 疾患順位 (女性)

1 急性膀胱炎	1640	37.9 %
2 慢性膀胱炎	705	16.3
3 尿管結石	282	6.5
4 腎 結 石	227	5.2
5 尿道カルンケル	206	4.8
6 遊 走 腎	159	3.7
7 急性腎盂腎炎	122	2.8
8 慢性腎盂腎炎	93	2.2
9 膀胱頸部ポリープ	88	2.0
10 膀胱腫瘍	77	1.8
そ の 他	726	16.8
合 計	4325	100.0

(4) 小児疾患頻度 (Table 7)

小児疾患頻度は包茎が第1位を占めるが大部分は不完全包茎で処置を必要としなかった. VUR の年次増加は近年特に著しく, 特殊外来設置による患者の follow と積極的な膀胱造影などによる発見がおもな理由であろう (Fig. 2).

Table 7. 疾患順位 (小児)

1 包 茎	401 名	21.1 %
2 停留嚢丸	323	17.0
3 夜 尿 症	193	10.2
4 急性膀胱炎	191	10.1
5 包 皮 炎	138	7.3
6 陰嚢水腫	98	5.2
7 尿道下裂	76	4.0
8 V U R	70	3.7
9 神経因性膀胱	33	1.7
10 腎 結 石	23	1.2
そ の 他	350	18.5
合 計	1896	100.0

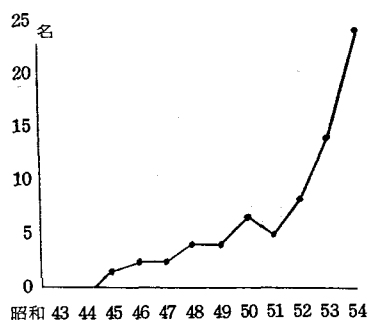


Fig. 2. 小児の VUR 年度推移

(5) 非特異的炎症 (Table 8)

非特異的炎症では急・慢性膀胱炎が 69.3%を占め, 女性に圧倒的に多かった.

Table 8. 非特異的炎症内訳

疾患	患者数	%	男女比
1 急性膀胱炎	2228	51.1	0.36
2 慢性膀胱炎	858	18.2	0.22
3 急性副睾丸炎	295	6.9	—
4 急性腎盂腎炎	185	4.4	0.52
4 包皮 炎	185	4.4	—
6 急性尿道炎	183	4.3	6.04
7 前立腺炎	120	2.9	—
8 慢性腎盂腎炎	117	2.8	0.26
9 精囊腺炎	75	1.8	—
10 慢性尿道炎	69	1.7	5.30
11 辜 丸 炎	29	0.8	—
12 慢性副睾丸炎	27	0.7	—
合 計	4371	100.0	0.68

(e) 尿路結石 (Table 9)

尿路結石は石神ら¹⁾, 仁平ら²⁾, 後藤ら³⁾, 原ら⁴⁾の報

告より若干高頻度であったが, 高安ら²⁾の報告と同じ頻度であった. 上部尿路結石は腎(32.7%), 尿管(59.9%)と尿路結石の92.6%を占めている. 世代別分布では上部尿路結石は20代から40代にかけて多く, 下部尿路結石は高齢者層に多くみられた (Fig. 3). 百分率はおのおのの部位に対する各世代の割合を示す.

Table 9. 尿路結石の部位別内訳

	男性	女性	全体	%	男女比
腎	405	227	632	32.7	1.78
尿管	877	282	1159	59.9	3.11
膀胱	112	22	134	6.9	5.09
尿道	9	0	9	0.5	—
合計	1403	531	1934	100.0	2.64

(7) 腫瘍 (Table 10)

腫瘍では45.0%と約半数近くを前立腺肥大症が占め, 平均寿命の延長によってさらに症例の増加が見込まれ

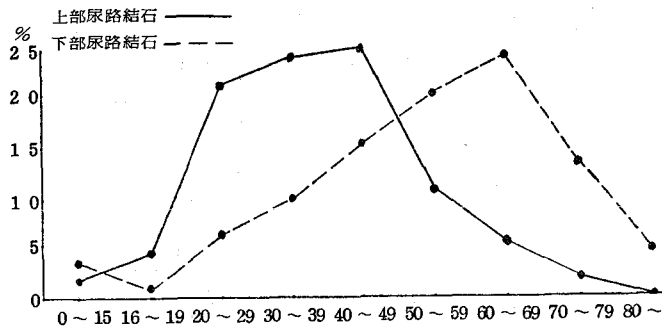


Fig. 3. 尿路結石の世代別分布

Table 10. 腫 瘍 内 訳

疾患	男性	女性	全体	%	男女比	平均年齢 (SD)
1 前立腺肥大症	802	—	802	45.0	—	68.3 (9.4)
2 膀胱腫瘍	241	77	318	17.9	3.13	61.9 (15.0)
3 カルンケル	—	206	206	11.6	— (女) [#]	61.4 (12.5)
4 前立腺癌	95	—	95	5.3	—	71.0 (9.6)
5 膀胱頸部ポリープ	3	88	91	5.1	0.03	47.5 (13.0)
6 辜丸腫瘍	42	—	42	2.4	—	28.1 (19.0)
7 尿道腫瘍	14	25	39	2.2	0.56	58.3 (15.6)
8 腎腫瘍	27	10	37	2.1	2.70	56.1 (11.0)
9 陰茎腫瘍	33	—	33	1.9	—	55.4 (15.2)
10 尿管腫瘍	15	3	18	1.0	5.00	61.2 (8.2)
11 後腹膜腫瘍	9	4	13	0.7	2.25	49.1 (16.5)
12 腎盂腫瘍	8	4	12	0.6	2.00	58.7 (13.2)
13 浸潤癌・転移癌	25	50	75	4.2	0.50	60.2 (18.3)
合 計	1314	467	1781	100.0	2.81	61.7 (13.9)

: 女性のみ

る。

悪性腫瘍のみに限ると膀胱腫瘍 318 名 (46.6%)，前立腺癌 95 名 (13.9%)，睪丸腫瘍 42 名 (6.2%)，以下尿道腫瘍 (5.7%)，腎腫瘍 (5.4%) の順であり，浸潤癌・転移癌が 75 名 (11.0%) を占めた。

睪丸腫瘍は発生年齢が他の腫瘍に比べて最も若い。これは小児例が約 30% を占め，ついで 20 代～30 代が約 40% を占めることによる。また睪丸腫瘍は近年増加の傾向が見られる。

(8) 奇型 (Table 11)

奇型では包茎 (43.2%) と遊走腎 (14.7%) が上位を占める。前者は前述したように大部分が処置を要しない不完全包茎であり，後者は奇型の範疇とするには問題があるが，便宜上奇型としてあつかい集計した。停留睪丸，尿道下裂の男児奇型が当然ながら上位を占める。尿道下裂は平均的発見率を示すが，停留睪丸は 1973 年 (昭和 48 年) より急激な増加を示し，出生後の定期検診のはたす役割が大きいものと思われる。

Table 11. 奇型内訳

疾 患	患者数	%	男女比
1 包 茎	662	43.2	—
2 停留睪丸	362	23.7	—
3 遊 走 腎	225	14.7	0.42
4 尿道下裂	84	5.4	—
5 重複尿管	64	4.2	0.68
6 嚢 胞 腎	40	2.6	1.86
7 矮小陰茎	29	1.9	—
8 尿管異所開口	15	1.0	0.36
9 腎發育不全	14	0.9	0.56
10 馬蹄鉄腎	12	0.8	11.00
11 腎回転異常	4	0.3	1.00
11 半 陰 陽	4	0.3	—
13 腎 奇 型	3	0.2	—(女) [#]
13 尿道上裂	3	0.2	—
13 埋没陰茎	3	0.2	—
16 前置陰囊	2	0.1	—
そ の 他	4	0.3	3.00
合 計	1529	100.0	5.73

#：女性のみ

(9) 男性性的疾患 (Table 12)

男性性的疾患では男性不妊が 80.9% を占め，年次増加を Fig. 4 に示した。最近における男性患者に対する割合は石神ら¹⁾の 15% にはおよばないものの，高安ら²⁾，仁平ら³⁾の約 4% に比較すると多い。

(10) 特異的炎症 (Table 13, 14)

尿路結核症は岡島ら⁶⁾が横ばい状態もしくは漸次減少の傾向を示す調査結果を報告し，減少傾向は外来患

Table 12. 男性性的疾患

疾 患	患者数	%
1 男性不妊	711	80.9
2 Hypogonadism	55	6.3
3 陰 萎	48	5.5
4 性的神経症	41	4.7
5 膀胱神経症	15	1.7
6 A G S	3	0.3
7 持続勃起症	3	0.3
6 射精不能 [※]	3	0.3
合 計	879	100.0

※：逆行性射精を含む

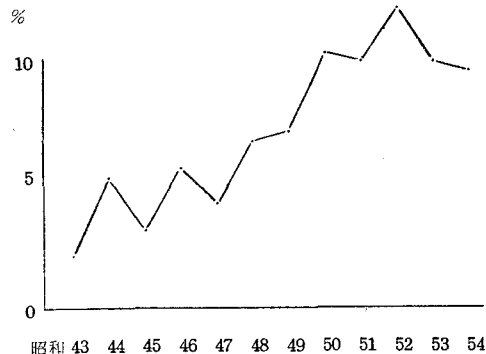


Fig. 4. 年度別不妊患者：男性患者に対する割合

者総数に伴う相対的減少であると述べている。われわれの集計において外来患者総数に対する割合を前期 6 年，後期 6 年で検討してみると，それぞれ 1.03%，0.79% と明らかに減少しているが，外来患者総数の増加から考えて，結核患者数としては横ばい状態である。さらに岡島ら⁶⁾の報告によれば，1966 年から 1970 年の 5 年間で 12 機関中 8 機関が 1.3～2.9% の間の有病率

Table 13. 尿路・性器結核の年度推移

昭和	腎	副睪丸	前立腺	合計
43	8	3	0	11
44	10	4	1	15
45	11	3	0	14
46	8	1	0	9
47	15	3	0	18
48	8	2	0	10
49	14	4	0	18
50	8	2	0	10
51	8	2	0	10
52	7	7	0	14
53	7	2	0	9
54	3	2	0	5
合計	107	35	1	143

Table 14. 淋疾の年度推移

昭和	総数 (女性)
43	11
44	13
45	9
46	7
47	7
48	7
49	5
50	6 (1)
51	5 (1)
52	14
53	6
54	10
合計	100 (2)

を示したと述べているが、1968年から1973年の6年間のわれわれの集計による有病率は1.03%と低かった。

淋疾は相対的減少を示すものの、あまり患者数の変動はない。患者の他施設への分散と言うより、大学病院は二次的受診施設の性格があり、新鮮例は激減している。

(iv) その他の疾患 (Table 15, 16, 17)

上部尿路疾患では腎出血が280例 (2.28%) と最も多く、吉田⁷⁾らの報告にもみられるように漸次増加の傾向がある。ついで水腎症144例 (1.17%), VUR 106例 (0.86%) が続く。腎出血は血尿の程度によって内科領域とも言える疾患も含まれ、精査を要する症例、経時的に尿所見の観察を要する症例などをすべて一括して集計した。

Table 15. その他の上部尿路疾患

疾 患	総数	男女比
腎 出 血	280	1.98
水 腎 症	144	1.09
腎 炎	73	1.28
腎 不 全	29	1.07
腎 囊 胞	28	0.75
腎 外 傷	18	5.00
腎杯憩室	15	1.14
腎血管性高血圧	6	5.00
膿 腎 症	5	0.00
V U R	106	0.49
尿管腔ろう	16	0.00
尿 管 瘤	15	2.00
尿管外傷	2	1.00
そ の 他	18	1.67

Table 16. その他の下部尿路疾患

疾 患	総数	男女比
膀胱頸部硬化症	286	16.50
神経因性膀胱	228	2.21
夜 尿 症	218	1.99
膀胱憩室	20	0.82
萎縮膀胱	17	0.89
膀胱腔ろう	15	—
膀胱異物	10	1.00
膀胱出血	8	1.00
膀胱外傷	3	— (男) [#]
膀胱脱	2	—
尿道狭窄	133	5.05
尿道出血	40	2.64
尿道脱	17	—
尿道外傷	15	14.00
尿道憩室	7	2.64
尿道異物	5	4.00 [#]
尿道皮膚ろう	4	— (男) [#]

: 男性のみ

Table 17. その他の生殖器疾患

疾 患	総 数
尖型コンジローム	15
形成性硬化症	8
陰茎外傷	8
陰茎折症	4
陰茎異物	2
陰茎屈曲症	1
陰嚢水腫	203
副睾丸嚢腫	27
辜丸回転症	19
辜丸外傷	12
陰嚢外傷	4
陰嚢内腫瘍	3
前立腺結石	42
精索水瘤	12
精索静脈瘤	9
血精液症	87

下部尿路疾患では膀胱頸部硬化症が286例 (2.33%), 神経因性膀胱228例 (1.86%), 夜尿症218例 (1.77%), 尿道狭窄133例 (1.08%) が多かった。膀胱頸部硬化症は従来、論議の多いところで、その診断基準も施設によって種々であり、症例数は必ずしも正確なものとは言えないかもしれない。urodynamic study の確立とともに、本症の頻度は減少の傾向がみられるであろう。尿道狭窄は吉田⁷⁾の報告同様、淋疾によるものは明らかに減少し、近年では全く稀である。

その他の生殖器疾患では陰嚢水腫203例 (1.65%),

血精液症87例 (0.70%) がめだった。血精液症は、その原因を明らかにすることができない例が多く、少数例であるが治療困難な例もある。今後課題を残す疾患である。

3) 疑診群

尿路結石、腫瘍、結核および淋疾において、それぞれの疾患の確診症例数に対する割合が高く、尿路結石を除く疾患では、より慎重な診断術が要求され、確定診断への努力が肝要と思われる (Table 18)。

Table 18. 疑診群内訳

系統別疾患	総数	疑診/確診
非特異的炎症	171	3.9%
尿 路 結 石	477	24.7
腫 瘍	206	11.6
奇 型	105	6.9
男性性的疾患 及び 精神身体疾患	65	5.9
結核 及び 淋疾	122	50.4
その他の上部尿路疾患	92	12.1
その他の下部尿路疾患	160	19.8
その他の生殖器疾患	33	7.7
合 計	1431	11.6

4) 未診群

初回の受診のみの症例が大部分で、確診、疑診群に入るべき症例が多く含まれているものと考えられる (Table 19)。

Table 19. 未診群内訳

症 状	総数	男女比
頻 尿	144	1.48
尿 失 禁	138	0.62
塩 類 尿	94	3.42
血 尿	66	1.24
蛋 白 尿	39	3.14
排尿障害	30	1.00
腹部腫瘍	18	1.83
腰痛・腹痛	18	1.13
性器發育不全	12	—(男) [#]
膿 尿	3	2.00
乳 び 尿	3	2.00
浮 腫	3	0.50
陰 茎 痛	3	—
辜 丸 痛	3	—
外 陰 部 痛	2	—(女) [※]
そ の 他	2	1.00
合 計	578	1.74

: 男性のみ

※ : 女性のみ

＜結 語＞

最近 12 年間に三重大学泌尿器科を受診した新患 15,888 名について、確診、疑診、未診、正常の各群に分類し、確診群を中心に疾患の種類、頻度、性別、年齢分布、年度推移などについて集計した。

(付記) 著者名はこの期間に三重大学医学部泌尿器科学教室に在籍したものである。

文 献

- 1) 石神襄次・ほか：泌尿紀要，23：611，1977.
- 2) 高安久雄・ほか：日泌尿会誌，69：917，1978.
- 3) 後藤 甫・ほか：西日泌尿，39：1017，1977.
- 4) 原 種利・ほか：西日泌尿，41：791，1979.
- 5) 仁平寛巳・ほか：泌尿紀要，20：89，1974.
- 6) 岡島英五郎・ほか：泌尿紀要，19：139，1973.
- 7) 吉田 修・ほか：泌尿紀要，23：861，1977.

(1980年3月27日受付)